

報告書

復興記念館——災害の記憶とシビック・プライド

総合文化政策学部准教授 天内大樹

A. 背景1：デザイン史学をめぐる問題

デザインの歴史を把握するにあたり、時間軸に関しては近代、すなわち複製技術と大量生産の成立以降と、仮に領域を確定させられるものの、空間軸に関しては学問上歓迎すべきグローバル化が生じ、これまでの欧米中心のスタンダードに関する研究群からみて対象が拡大している。また歴史学の方法論的転回により、一部のデザイナーによる名品の歴史から、日常を取り囲むマテリアルヒストリーへと考察対象が拡大している。さらにデザイン概念そのものが、物質をめぐる操作技術から抽象化されて生活世界の秩序化へ拡大し、その上で、知的生産の名の下に、複雑性やカオスと名指される事態に対処する発想と経営に還元され、ありとあらゆるビジネスに適用されつつある。デザイナーの技能の一部はウェブサービスやAIでノンデザイナーに提供され始め、彼らの業務の大きな割合がコンサルティングに割かれ始めている現在、歴史に携わる者は、デザインの技能や職能を歴史に基づいて再考する必要に迫られている。

以上に鑑み、デザイナーと一般社会双方にわたる、デザインという領域に関する共通理解の醸成という課題が成立するが、その解決法として歴史的探究そのものとともに浮上したのが、歴史の空間化・視覚化による人々への共有、つまり歴史記述の一形態としての展示である。

B. 背景2：デザイン博物館をめぐる問題

自国の観点に基づいてデザイン史の総体を示す博物館はすでに海外に存在するが、国内では相当する博物館がない。日本のデザイン史として何が名品であるか（したがって展示すべきか）という議論は間欠的に続いているものの、その総体とはどのようなものであり、どう具体化するのかという収集・展示方針に関する議論は蓄積されていない。欧米中心のスタンダードのデザイン史を展示という形態で示すだけならば、文献においても教科書が日本語で編集されている（筆者も加わった）し、海外の事例を輸入することもできる。しかし日本発信のデザイン史をいかに編集すべきかについては、自らの足元をみつめて随所に定義や区別を加え、その脈絡を辿りながらも、枝葉をうまく剪定する必要が生じる。

残念ながら展示という方法は、歴史学の言語論的転回による記述方法の幾何級数的増加に抗して、特定の空間に一としての展示対象を置くよりほかない。ゆえに一つの展示物は、

多様な歴史記述を引き出すべきもの、すなわち象徴として展示空間に召喚されることになる。そのような展示を行う歴史博物館については、海外にすでに実例があり、ナショナル・ヒストリーを示しながらその国境線を揺るがす、あるいは国家の物語に回収せず民衆の生活を示すなどの試みを見ることができる。日本の歴史博物館についても歴史学界で議論が蓄積されていよう。しかし本研究の背景となる問題は、日本のデザイン史として、多様な側面を示す領域をいかに一旦確定させて展示物の連関を編んでいくかであるから、問題にはナショナルかグローバルか、国家の政治や軍事か民衆の生活かという対立軸以上のものが含まれる。例えばデザインとは何か、名品と日常的な製品との問題、非物質的な要素を案内文や展示キャプション以上にものを通していかに語るかなどが考えられるが、これらは問題群のさしあたり思いつく一端にすぎない。

さらに、博物館学や近年の展示実践にみられる傾向として、総体としての連続的な通史を示して一種の権威となることを避け、展示品の配列によって断片的な系譜を実体化しているという姿勢を取る。それは第一義的には歴史学そのものにおける態度の転回に基づく。しかしそうした姿勢は、展示内容の断片化により、歴史の知識を教条的に伝達することを避け、観衆がもつランダムな思考の枠組みや態度に影響すること、あるいは彼らの発想を刺激することを目論んでもいる。これはポスト産業社会における教育観に基づいているかもしれないし、ポスト教養主義あるいはネット社会における博物館の存在意義の確保、施設の維持という実際の動機に基づいているかもしれない。思想の視座からみれば、引用の断片を共時的に並列された展示というとポストモダニズム的であるが、今後はいかなる断片がいかなる連関の下に並列されるかが重視されると考えている。出版状況においても、通史を一人で書ききった書物は減っており、歴史家はむしろ過去にアプローチするための新たなテーマを作り出すことに注力しているように思われる。例えばある一つの出来事に関する視座や観点の変更が、歴史の構造全体を、ひいては現在を捉える枠組みに影響する——という一点を搜索しているように思われる。本研究に示唆的なのは、その一点が一つの展示物や一つの展示空間として物理的な形態を構成すること、そこから共同体の意識が発生し一定の内容をもつことへの期待である。

求めるべき展示方針は、日本独自の内容を追究することで世界のデザイン史学に新たな視点で貢献すること、しかし日本一国主義や名品主義に陥らず、デザインを通して新たな歴史観を示すこと、この2点をもって再定義されたデザイン領域の総体を、展示という物質・空間に集約して共有することである。これにあたっての困難は第一にデザインという領域の定義に関わっており、第二にその総体を展示するにあたっての通史という方法論の是非に関わっていると考えられる。

C. 対象の選定

以上のデザイン史学とデザイン博物館のいまだ見ぬ姿に向けた問いと同型の困難をもちながら、おそらく展示対象の選定基準が比較的明確ゆえに、展示実践として広く見られる施設が都市博物館である。都市一般を総体的に把握するにあたり、その対象は巨大かつ多面的であり、樹状図のような体系性ももたない。したがって何らかの媒体を通じてその情報量を縮減させる必要がある——以上はデザインの歴史と共通する。しかし、いずれの都市に関する展示であるかという点に関しては国家よりも揺るぎがないため、思考実験の条件を揃えるには都合がよい。また都市との結びつきの強い物品が優先的に展示される場面では、名品主義も成り立たない。都市独自の展示内容が予め担保され、一国主義の弊害を免れ、ある一都市を通じて純粋に新たな歴史学のあり方を示せる、さらにその施設が都市内部に存在し、その都市を象徴として具現化している（訪問者にとってその都市をガイドする存在たりうることから、エコミュージアムの側面をもつ）という利点から、まずは通史のあり方という点で都市博物館を検討する意義がある。都市をデザイン諸分野の一部とみなすこともできるし、諸デザイン分野が集積したものとして都市をみなすこともできよう。

さらに、都市の多様性にもかかわらず、都市住民がおしなべて共有できる圧倒的な経験とは巨大イベントと災害である。その点で、例えば広範囲に被害をもたらした災害に関しては一都市という側面が弱くなるが、災害を記念する施設も同様に検討する意義がある。本研究では特に復興記念館と名が付く東京・仙台・浜松の3館を研究対象としている。震災・戦災の被害面だけでなく、そこからの復興という都市再建の物語を表象する展示を考察している。ただし、今後の研究の展開を見据え、各地での見学対象には災害記念館、都市博物館全般を含めている。

展示施設が成立する、成立し続けるためには、設立までの市民の動き、行政その他のイニシアティブ、すなわち施設の設立・開館の時点が従来語られる際の焦点となってきた。しかし、施設の維持・発展を考慮すれば、設立以降の市民や観光客の訪問、施設側の教育活動やアウトリーチ、市民やメディアによる施設見学の推薦、それに堪える展示内容の更新、これら相互作用から生じる信頼や誇り（かりにシビック・プライドという用語を充てる）なども要因として重要である。そこで、施設や展示什器を設立時の静態に留まらず不断の更新プロセスの一段階とみなすよう努めている。そこで、展示形態については、空間において人々の身体を超える大きさと長期間の展示に耐える持続性をもち、ゆえに空間・時間を分有する観衆が観覧体験を共有できる、都市模型と地図（特に水平に広げられた大きな地図）という展示媒体が果たす役割を重視する。以上の観点を軸にして、本年度は特に災害記念館の見学と、文献調査において進展がみられた。

ただし、調査の過程で、例えば京都市学校歴史博物館のように、市民に共有される日常的な体験（京都市内の校区という地元組織に根ざした小学校の存在と、そこで児童として教育を受けた体験）をテーマとした施設の存在も浮上した。都市の総体を総合的に扱う施設

ではなく、トピックごとに扱う施設という点では、これらは災害をトピックとした都市博物館すなわち災害記念館と同列にみなすことができる。今後の検討においては、都市の歴史と現状を市民に共有するため常設される展示を都市博物館とその周辺と定める。展示施設そのものと展示内容を都市表象の一端と位置づけ、これらを多角的に検討することを通して、都市一般を総体的に把握する方法論を探求している。

D. 作業の進展

本年度は、復興記念館と名が付く東京・仙台・浜松の3館（東京都復興記念館、仙台市戦災復興記念館、浜松復興記念館）を中心に、震災・戦災からの復興という物語を表象するための展示装置・内容、その際都市模型と地図という展示媒体が果たす役割に関し、検討を行った。この作業の足がかりとして、本年度の研究では、第一に都市博物館の中でも災害復興をテーマとする国内「復興記念館」3館を実地に調査し聞き取りなどを行うことを想定していた。しかし仙台における市役所改築のためのアーカイヴ一部閉鎖など、タイミングがあまり合わず、この点では継続して調査を続ける必要が生じている。東京、横浜（現存せず）に関して、行える限りの文献調査は現在も進行中である。

応募者はすでにこのテーマで予備的考察を口頭発表しており（「復興記念館の設置目的と展示——東京・仙台・浜松の比較」、日本文化政策学会第17回年次研究大会、青山学院大学、2024.3.16）。当発表の予稿では東京都復興記念館、仙台市戦災復興記念館、浜松復興記念館の3館を対象に、3都市の被害と復興の状況、設置の経緯について得られた情報を整理し、口頭発表では中国（特に北京、上海）、台湾（台北）、アメリカ（ニューヨーク、シカゴ）の事例と比較しながら3館の特徴と適合すべき理念を仮説として触れた。以上を論文として『青山総合文化政策学』に投稿したが、論文として認められなかった。これに国内外の美術館・博物館との比較から実証的データを補足し、視点の多面化をめざした再調査を加え、2025年春の日本文化政策学会誌への投稿を今も検討しているが、『青山総合文化政策学』への次年度投稿も視野に入っており、拙速だった議論の整理に努めている。

今年度予定していた第二の作業に関して、各館の見学にも予定ほどには時間を割くことができなかった。しかし僅かな見学の成果のうち、「熊本地震震災ミュージアム 記憶の廻廊」は回廊型フィールドミュージアムと銘打ち、旧東海大学阿蘇キャンパスと熊本県庁防災センターの二つを中核拠点とし、二点間に分布する各市町村で整備した拠点や震災遺構などを回遊させるという試みは興味深い。理由の第一は、施設の整備をもって完成としていない点で、同ミュージアムのホームページではこれら施設群を利用して「地震の記憶や経験、教訓を風化させずに後世に伝えていく」必要性を唱えている。理由の第二は、展示媒体の巧みな使い分けである。整備済みの施設として東海大学校舎の丘下に建てられた熊本地震震災ミュージアムKIOKUがあるが、そこでは断層型・直下型地震のメカニズムと影響範囲を示

すため、被災範囲と断層を示す1:12000ジオラマ模型が設置され、地形の立体的な構造を一目で把握できるようにしている。一方、地震の発生および被害という時間軸上の出来事に関しては、展示館冒頭にある被災品展示により被害の程度を示しているのとは別に、追体験や証言といった内容の映像を用いていた。理由の第三は、中核拠点と各施設を回遊することで現地に慣れ親しむこと自体を展示の効果とみなしている点であり、これはエコミュージアムという観点を十分に活かした例と考えられる。

文献調査に関しても進展がみられた。台北については殷寶寧『臺北・城市・博物館』（典藏2023）を入手した。都市博物館の制度的成り立ち、内容に関わる諸要因の把握を目的としている。同書の特徴は、臺北探索館の開館につながる活動の先駆けとして、市民の都市に対する認識を立ち上げる運動「臺北新故郷」を位置づけていることにある。戦後一党独裁を続けてきた国民党に対抗する、民主進歩党から台南出身の陳水扁が台北市長を務めていた時代の市民運動であり、これを重視している点は国家と都市の関係をめぐるアイデンティティ・ポリティクスを考察する上で興味深い。台北周辺だけをみても、原住民としてのケタガラン（凱達格蘭）族、閩南、客家、漢族系本省人、眷村をなした国民党軍人、その他外省人、また戦後の開発独裁の中で農漁村を離れ移入した人々……といった地域的に多様なアイデンティティが各々明瞭に認識され、この横軸に戦前の日本語教育、戦後の国民党教育、解嚴（戒嚴令解除）後の民主化、大陸中国との距離感などに発する世代の断層が縦軸として重なる。この状況下で都市台北に関わる「台北学」を推進し都市博物館建設を構想すること自体、すぐれて政治的な行為であろう。引き続き中国語文献だが内容の把握に努める。

米国についてはシカゴ歴史博物館を中心に文献調査を続けている。ミュンヘンのハウス・デア・クンストに関しては、同館における芸術展示の政治的利用をまとめた書物 *Histories in Conflict: Haus der Kunst and the Ideological Uses of Art, 1937-1955* を入手し、検討中である。また展示行為そのものを主題としたバーゼル・ティンゲリー美術館における *Fresh Window: The Art of Display & Display of Art* 展を見学し、論考を多く掲載した図録を入手したので、これも検討中である。

E. 具体的成果

展示の施設と内容を都市表象の一端と捉える方法について、一昨年度に見学したスコットランド・V & A ダンディーを対象に、文献を用いた追加的な調査結果を含めて考察した（印刷中：天内大樹「かつての産業を語り継ぐ——デザイン史的視座」浜松市博物館・静岡文化芸術大学『相曽形染機械染色関係資料 共同研究報告書〔論考編〕』2025, pp.50-57）。同館では展示に至るまでの考察過程や企画の成立過程などを一定程度公開しており、筆者も一度見学したが、そのときの体験を元にして断片的な情報群を遠隔からでも紡ぐことができた。同論考中では常設展と企画展の双方に言及しているが、展示の成立プロセ

スの一部再現できたものと考えられる。日本の公的施設に関して、ウェブサイトや文献を通じて同等の公開はあまり望めないとはいえ、東京の復興記念館については所属学芸員の論考という形で、一定の蓄積を見込めている。東京とダンディーに関する知見を、仙台・浜松における聞き取り調査に応用することで、断片的な情報を組み立てる方法を得られると期待したい。また上述の投稿に関しても引き続き記述の精度や議論の再構築などを図る。